

すみ文ステージ「住吉のうた」／住吉文化事業実行委員会主催  
「第2部」

## 大阪歌謡事始め — 日東レコードから

### 石浜恒夫「こいさんのラブ・コール」まで —



住吉にゆかりの「うた」は、万葉、新古今の古の和歌朗詠から始まり、中世に盛んになった連歌や、近世には大社の御田植神事の住吉踊が全国に流布し、堺の高三隆達たかみさりのりゆたつが創始した「隆達小歌」や、江戸の初代十寸見河東ますみかとうによる「泰平住吉踊」の流行もあった。近代に入っては新民謡の中で「住吉音頭」も生れた。

このように住吉を題材にした「うた」には多くの展開があったが、この地域で生れたものという観点で見ると、日東蓄音器の立地と、その近くで生れ育った石浜恒夫の存在を忘れることはできない。それは「大阪歌謡」の誕生した地とも言えるだろう。これらもまた「住吉のうたの神さん」の采配に違いないが、のちに「歌謡曲」と呼ばれるようになった流行歌の誕生を中心に、見て聴いてみたい。

## I. 日東蓄音器・ニットーレコードの歌謡曲

### 1. ニットーレコードの歴史

大正9年(1920)3月、住吉大社の南門前(東の大鳥居の前)に、財産家の白山善五郎と森下仁丹の森下辰之助によって「日東蓄音器株式会社」が創業した。翌大正10年4月には、「ツバメ印ニットーレコード」の名で、10インチ盤による新譜を発売し、邦楽に力点を入れたラインナップを誇っていた。

コロンビアやビクター、ポリドールなど東京を中心に展開されていた外資系のレコード会社に対抗して、地場産業としてのレコード会社を創ったのであるから、義太夫や浪花節、新民謡や演芸物などに強かった。日本資

本のレコード会社は、京都のオリエント・レコード、西宮の内外レコード（大平蓄音器・タイヘイレコード）、尼崎のトーア・レコードなど関西に数多くあり、独自の企画を展開していた。



社長  
白山善五郎氏

日東蓄音器株式会社  
工場

大阪市住吉区土佐町南門前  
日東蓄音器株式会社工場  
電話一〇五〇・住吉三七一番

大阪市東区福後町二丁目一番地  
日東蓄音器株式会社  
電話本町一四八〇・五五六七番

東京都京橋区紙一丁目五番地  
日東蓄音器東京営業所  
電話京橋五七・三〇六二番

福岡市中央区四六番地  
日東蓄音器九州営業所  
電話一二六番

日東蓄音器株式会社は大正九年の創立にして資本金五拾萬圓創立の主旨は純國産レコードに蓄音機の製作にあつて、當時我が社の出現は外資系の会社を以てて現存されてゐた我國蓄音器界に非常なセンセーションを興起した面して我が社の蓄音器に於ける發展は其足跡に依つて創立後僅に數年を以てして名實共に日本に於ける代表的蓄音器社と認めらるゝに到つた。

尙日東蓄音器社の製作レコードは、現代日本の名人第一流編曲家の名曲を創製し復舊社の製造及し備はざる内容の志業を具備してゐる殊に最近發賣したニットー長時開レコードの如きは世界の蓄音器社に一掃絶元を劃する殊異の製品として好評を蒙つてゐる。

ところが、コロムビアやビクターが攻勢を仕掛け、ニットーレコードを販売する店には蓄音器を御さないなどの措置に及んで、当初は



三號 定價七拾五圓  
二號 定價五拾五圓  
四號 定價九拾五圓  
五號 定價百參拾圓

日東蓄音器株式会社  
大阪市住吉区土佐町南門前  
電話一〇五〇・住吉三七一番

「ニットータイムス」大正15年10月号

『大大阪画報』昭和3年6月刊の広告

自社生産していなかった蓄音器本体を「日東号」として生産し始めた。

しかし、昭和期に入つて流行歌・洋楽分野への展開が遅れ、ドイツ原盤クリスタルレコードを傘下に置いたが業績が低迷し、乱立するレコード会社の再編の中で、昭和10年(1935)7月、日東蓄音器は傘下の日本クリスタルと共に太平蓄音器と企業統合し、西宮に新会社大日本蓄音器株式会社を設立するに至つた。その後、タイヘイレコードをメインとしクリスタルは洋楽、ニットーレコードはサブレーベルとして存続した。

ついに、昭和17年(1942)2月、国家総動員法によりキングレコードに吸収合併されてニットーレコードは終焉してしまふ。レーベルとしては22年間の歴史だった。

## 2. 「道頓堀行進曲」の流行

ニットーレコードは宝塚少女歌劇や日東歌劇団などの演劇ものも録音していた。昭和3年(1928)1月、神戸・京都・大阪の各松竹座で、映画の幕間劇として岡田嘉子<sup>おかだよしこ</sup>一座の寸劇「道頓堀行進曲」が上演された。その録音を「モダンスケッチ 道頓堀行進曲」として2枚4面で発売した。その中で歌われたのが、同名の大ヒット曲で、筑波久仁子の歌のみで発売し、浅草オペラの内海一郎<sup>うちみ いちろう</sup>でも吹き込んだ。大阪歌謡の嚆矢と言えるだろう。

寸劇の内容は、カフェーを舞台に繰り広げられる男女の三角関係と惨劇で、最後に「ああ、よかつた・・・夢で」というオチ。劇中に挿入されたのは、松竹楽劇部の座付き脚本家・日比繁次郎<sup>ひびはんじろう</sup>の作詩に、同じく楽

劇部の作曲家・塩尻精八しほじりせいはちが作曲した主題歌である。岡田嘉子は昭和13年1月に、演出家の年下の杉本良吉と樺太から雪の中を馬橋に乗ってソ連に亡命したことが話題になった。

### 3. 服部良一の専属化と「さくらおけさ」

ニットーレコードの東京九段下の吹き込み所の開設に際して、服部良一が音楽監督に就任した。道頓堀ジャズに発する服部は、日本の旋律を残した新しい和製ジャズを目指していた。

昭和8年(1933)にビクターが発売した「東京音頭」(西條八十作詞、中山晋平作曲)は、小唄勝太郎の「♪踊り踊るなら、チヨイと東京音頭、ヨイヨイ」の節回しで大ヒットし、盆踊りの定番になった。翌年春には各社競って「さくら音頭」を発売する。

服部良一は「こっちは“おけさ”でいこう」と提案し「さくらおけさ」を作曲し、専属歌手となった美ち奴がこれでデビューした。その後、美ち奴とのコンビで大量の新民謡を作曲する。

ニットーレコードのタイヘイレコードへの吸収合併により、服部は2年間で日



本コロンビアに移籍するが、和製ジャズやブギウギはそれから開花することになる。

ニットーレコードが大阪に誕生し、それも住吉の地で創業されたのは、東京中心の外資系に対抗する気概と、住吉という文化的に色濃い土地柄から義太夫や浪花節、花柳界とのつながり、春団治やエンタツ・アチャコなど寄席芸の録音に力点を置いたのは大きな成果だった。

### 4. エンタツ・アチャコ「早慶戦」の吹き込み

漫才作者になりたての秋田實とエンタツ・アチャコによって、しゃべくり漫才の嚆矢である「早慶戦」が生れたのも昭和9年頃のことだった。

ニットーレコードでは初代桂春団治やエンタツの芸を多く吹き込んでいて、地の利を活かしたレコードだと言える。

三代目春団治は玉出、六代目笑福亭松

鶴は粉浜に住んでいたが、初代桂春団治は二号さんを上住吉に住まわせていて、大正14年にはニットーレコードから本物の煎餅でレコードを作ったという逸話がある。

横山エンタツもニットーレコード近くの上住吉に住んでいた。藤沢恒夫は昭和11年朝日新聞連載の『花粉』にエンタツ・エノスケを登場させ、昭和14年にはエンタツをモデルにした『緑の褥』を書いている。



## II. 墨江に生まれ育った石浜恒夫の大阪歌謡

### — 石浜紅子さんとたどる流行歌の数々 —

#### 1. 石浜恒夫の略歴

大正12年(1923)、東洋史学者石浜純太郎の長男として現在の住吉区墨江に生まれる。天王寺中学、大阪高校を経て東大美学科卒。17歳の時に藤澤恒夫に紹介され川端康成に出会い、鎌倉の邸に書生として同居した。

小説家を目指して「文学雑誌」などに作品を発表し、和29年(1954)、『らぶそでい・いん・ぶるう』が芥川賞候補になった。

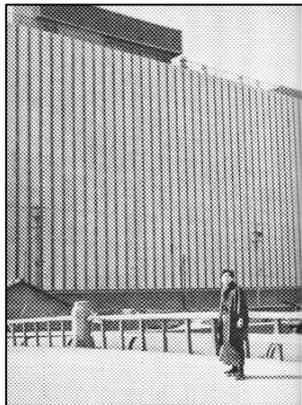
作詞家としては、西区北堀江のマンモスアパートに住んでいた昭和33年からの10年間に開花し、同シアパートに住む作曲家大野正雄と組んだ「こいさんのラブコール」が最初である。昭和38年(1963)に娘の紅子が誕生した。

昭和43年(1968)、川端康成のノーベル賞授賞式に同行し、昭和52年(1977)には13歳の紅子と大西洋ヨット横断を成功させて大きな話題になった。

詩人としても『道頓堀左岸』などの詩集があり、詩誌「遠やまびこ」を主宰していた。多くのヒット曲を世に送り、平成16年1月9日(2004)に80歳で他界した。同年八月、法善寺横丁入口に「大阪ぐらし碑」が建てられた。



祖父石濱豊蔵の葬儀の石濱邸



鯉座橋からマンモスアパート

#### 2. 「こいさんのラブ・コール」

昭和33年(1958)4月の「ABCホーム・ソング」。作編曲は大野正雄でラジオから流れた音源が使われた。

川端康成が昭和31年に新聞連載した小説『女であること』に題材を得て作詞された。北浜の銀行家末娘(こいさん)が自立を求めて東京に家出をするというストーリーが歌い込まれている。大阪歌謡の嚆矢である。

#### 3. 「大阪ぐらし」

作曲家大野正雄でフランク永井が歌った第2弾。法善寺横丁の入口に歌碑が建てられている。



#### 4. 「大阪ろまん」

作曲家吉田正とのコンビで  
フランク永井が歌った。

キタの風情やミナミは織田作  
之助の『夫婦善哉』が歌い込め  
られている。

元祖「好きやねん」である。



#### 5. アイ・ジョージとの出会い 「硝子のジョニー」

昭和36年(1961)、アイ・ジョ  
ージから石濱恒夫に作詞を依頼  
してできた曲。アイ・ジョージ  
は大阪最大のナイトクラブの北  
区堂島の「クラブ・アロー」の  
専属歌手になり、トリオ・ロス・  
パンチオスの日本公演の前座歌  
手になり、同じ前座だった坂本  
スミ子と共に大いに売り出され  
た。



#### 「紅子のバラード」

石浜恒夫の娘紅子(まにこ)は、  
昭和38年12月12日に生まれた。  
中村八大の第一子の誕生に際して  
永六輔作詞、中村八大作曲で「こ  
んにちは赤ちゃん」が作られたば  
かりで、石浜恒夫も娘の誕生に際  
して、その娘が二十歳になっても  
歌えるようにと「紅子のバラード」  
を作詞し、アイ・ジョージが曲を  
付けて歌った。昭和39年(1964)の  
第15回紅白歌合戦で、アイ・ジョージは「紅子のバラード」で出演した。



#### 「道頓堀左岸」

石濱恒夫は昭和42年(1967)に詩集『道頓堀左岸』を土田書店から限定  
出版した。あわせてアイ・ジョージに歌詞「道頓堀左岸」を提供し、テイ  
チレコードから発売された。

